

住宅建築賞
入賞作品展 2013
6.14 金 ~ 7.19 金

[日曜・月曜・祝日休館]
10:00~18:00 金曜日19:00まで
AGC studio | 入場無料

住宅建築賞
入賞レセプション
オープニングパーティー
2013.6.14 金

申込先着順 定員:100名 入場無料

入賞レセプション
16:30~18:20 AGC studio(2階)
オープニングパーティー
18:30~20:00 AGC studio(2階)

※入賞レセプションは審査委員による入賞作品講評、
および入賞者とのディスカッションになります。

住宅建築賞 審査委員
委員長：西沢立衛 委員：妹島和世 / トム・ヘネガン / 林寛治 / 藤本壮介

協 賛

株式会社 建築資料研究社 日建学院
株式会社 総合資格

協 力

旭硝子 株式会社

後援予定

公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
日経アーキテクチャ

主 催

一般社団法人 東京建築士会

[申し込みお問合せ先]
東京都中央区晴海 1-8-12 オフィスタワー Z 棟 4F
tel.03-3536-7711 fax.03-3536-7712
e-mail.info@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp



〒104-0031 東京都中央区京橋2-5-18 京橋創生館1・2階
tel.03-5524-5511 www.agcstudio.jp

TOKYO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS PRESENTS

住宅建築賞 入賞作品展

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE
2013

| 主催 | 一般社団法人 東京建築士会



住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞

- 荒木 源希 + 佐々木 高之 + 佐々木 珠穂 + 岸田 佳晃
- 西田 司 + 一色 博貴 + 梁井 理恵
- 篠崎 弘之
- 藤原 徹平

奨励賞

- 葛川 かおる + 鹿田 征歳
- 清水 裕子 + 清水 貞博 + 松崎 正寿
- 三浦 慎 + 濱野 義夫



■ 応募主旨 [委員長 西沢立衛]

【新しい住宅】

住宅は、私たちの生活にとってもっとも身近な空間の一つです。そこには、私たちが生きる上での価値観が色濃く表れます。価値観とは、何を重んじて何を重んじないか、ということ。具体的なことでは、洋室より和室がいいとか、もしくはひとりて暮らすことよりも友人と暮らすのがいいとか、またはこういう地域にすむのがいいとか、そういういろんなことです。住宅には、「生きる上でこれが重要だ」という私たちの価値観が空間的に表明されます。どう調理するか、どう風を入れるか、どんな構造体か、どんな窓か、どんな庭か、それらはどれも、私たちの考え方、価値観というものが建築化したものです。

そのような意味でも、新しい人々が新しい時代の住宅創造に挑戦すれば、そこには必ず、新しい人々の価値観、新しい時代の息吹のようなものが感じられる、瑞々しい提案となるのではないのでしょうか。なにが快適かとか、何が要らないとか、何が美しいかとか、そういういろんなことが渾然一体となって住まいとなり、生き方となって、新しい時代を切り開く新しい精神を世に示してゆくのではないのでしょうか。

■ 応募要項

- (1) 上記の主旨にかなうもの
- (2) 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする
(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- (3) 原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
- (4) 雑誌等に発表したものでもよい
- (5) 建築物の所在地は東京圏とする
- (6) 応募の点数は自由とする
- (7) 審査委員の関与した作品は応募できない

■ 審査委員

委員長：西沢立衛

委員：妹島和世／トム・ヘネガン／林寛治／藤本壮介

■ 応募要件

| 応募資格 |

応募作品を設計した建築士
(法人組織の場合は設計担当した建築士)

登録料	本会正会員	無料(申込時に入会した方を含む)
	他県建築士会正会員	1点につき 5,000円
	会員外	1点につき10,000円

作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください。

| 提出期限 |

2013年1月25日(金)
(郵送の場合は、1月25日(金)の消印があり審査に間に合うよう到着したものは有効)

| 提出先 |

一般社団法人東京建築士会 住宅建築賞係
〒104-6204 中央区晴海1-8-12 オフィスタワーZ棟4階
TEL 03-3536-7711

| 提出資料 |

申込書及び本会指定A2版台紙

図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。その場合、氏名、送付先、連絡先、会員番号等を明記のうえ、FAX(03-3536-7712)にてご請求ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払いの旨お書き添えください。

■ 審査

- (1) 第一次審査(書類審査)に通過したものは原則として現地審査する。
- (2) 入賞発表 2013年4月中旬
 - ・審査結果については、応募者に直接通知する
 - ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金	
1	入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。 [住宅建築賞]70,000円 [住宅建築賞金賞]150,000円
2	建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。
3	表彰式：総会の席上(6月上旬予定)

応募図面の取扱い	
1	応募図面の公表及び出版の権利は主催者が保有する。
2	入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展(公開展示：6月開催)の予定がある。
3	入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰候補作品として、推薦することがある。
4	応募作品は返却しない。

2013年 住宅建築賞 審査結果

応募点数 117点 | 入賞 4点(金賞該当なし) | 奨励賞 3点

住宅建築賞 (受付順)		設計者	建築主	施工者
松竹台の家 (神奈川県)		荒木源希 + 佐々木高之 + 佐々木珠穂 + 岸田佳晃 株式会社アラキ + ササキアーキテクト	古市良彦 / 荒木真登	有限会社 原島建築 (建物構造：木造)
FIKA (東京都)		西田司 + 一色博貴 + 梁井理恵 オンデザインパートナーズ	塚本佳子	有限会社 大原工務所 (建物構造：木造)
House T (東京都)		篠崎弘之 篠崎弘之建築設計事務所	寺戸巽海 / 寺戸華恵	有限会社 伸栄 (建物構造：木造在来工法)
等々力の二重円環 (東京都)		藤原徹平 株式会社フジワラテッペイアーキテクトラボ	長谷川晃一	株式会社 広橋工務店 (建物構造：木造)

奨励賞 (受付順)		設計者	建築主	施工者
外・〈外〉・《外》 (埼玉県)		葛川かおる + 鹿田征歳 ああす設計室	葛川義廣	有限会社 技拓工房 (建物構造：木造)
KG.house (神奈川県)		清水裕子 + 清水貞博 + 松崎正寿 有限会社atelierA5建築設計事務所	加賀美長史	有限会社 大熊工務店 (建物構造：木造)
43base (東京都)		三浦慎 + 濱野義夫 三浦慎建築設計室	村嶋典子	日南鉄構 株式会社 (建物構造：S造一部RC造)

一次審査結果

2013年2月7日(木)実施。応募作品117点より、1人5点~9点を投票(審査委員5名)

投票した作品番号		投票結果(下記25点より、議論)											(計25点)		
審査委員	作品番号	獲得票数											合計		
西沢	10 34 45 48 73 78 96 108 110	3票	34	110											2点
妹島	10 29 32 73 75 110	2票	10	29	61	62	73	75	96						7点
トム	29 34 53 57 61 62 116	1票	7	18	19	21	32	45	48	53				16点	
林	7 18 19 21 58 61 62 80 84		57	58	77	78	80	84	108	116					
藤本	34 75 77 96 110														5点

下記7点を一次審査通過とし、二次(現地)審査対象とした。二次(現地)審査は、3月8日(金)に実施した。

一次審査通過	34	53	73	75	84	96	110
--------	----	----	----	----	----	----	-----



一次審査風景

総評

西沢 立衛

住宅建築賞の今年のテーマは「新しい住宅」である。応募作全117点の中から、第一次審査を経て七点を選出し、第二次審査（現地審査）対象作品とした。現地審査にご同行いただいた各建築家の皆様、突然の訪問を快く受け入れていただいた住まい手の皆様に、あらためて深く感謝申し上げたい。

「新しい住宅」というテーマは、「新しさ」を問うものだ。表面的・流行的な、時代とともに流れてゆく新しさよりも、むしろ時代を超えて生きる新しさを期待した。まず外・〈外〉・〈外〉は、入れ子構造形式の採用と半透明素材によって、住宅内にさまざまな室内環境を作り出すという野心的な試みで、明るい室内空間を実現した。FIKAは、単身で住む住宅兼週末店舗というユニークな機能で、小住宅ながら快適な住空間に巧みさを感じた。週末店舗と単身用住宅というものも、新しいビルディングタイプの到来を感じさせるものだった。43baseは、印象的な崖地の上に小さなユニットを積層させていくもので、都心ならではの現代性と軽やかさを感じた。崖の造成カットがあまりにインパクトがあり、その上の住宅よりも大きな印象となったのが残念だ。House Tは、現地審査対象作品の中でもっとも実験的な空間構成を持つ住宅だ。暗い一階土間空間に足を踏み入れたときの暗がりや、高い所から降り注いでくる光と風が素晴らしい。都会的で映像的な空間構成に、インターネット時代の感受性を感じた。等々力の二重円環は、僕としては現地審査対象作品の中でもっとも共感し、推した建物であった。全体に感じられる前向きなリアリズムと、木造をベースにした架構の瑞々しさに魅力を感じた。KG.houseは、現代的で快適なワンルームの空間の作り方に巧みさを感じた。松竹台の家は、二世帯住宅という複雑さを感じないシンプルな空間構成で、楽しそうな住まい方共々、魅力的な住空間を実現した。

各作品はどれも素晴らしいもので、審査委員間の議論は白熱した。各審査委員が推す作品が、各々異なっていた。しかし結論からいえば、金賞作品として全員の合意が得られる作品を選ぶには至らなかった。その理由は、各作品の質ということではなく、テーマとした「新しさ」ということが、想像以上に難しい課題だった。何を新しさと呼ぶか、その議論において全員で一作品に絞ることができなかった。もう一つ思うのは、住宅は今、夢のある未来を示唆するものというよりは、今の等身大の感覚を示すものであり、より等身大で感覚的・個人的なものになってきているように感じられた。混迷をきわめる現代建築において、新しい時代を予言することの難しさを感じる。しかしそれでも、日々生かされる住宅こそ、新しい価値観を空間として表し、建築を通して時代を予言するものであるはずだ、と今も思う。

講評

【住宅建築賞】

林 寛治

〔講評者〕

作品 **FIKA** 設計者 西田司 + 一色博貴 + 梁井理恵

近頃めずらしい店舗付き一軒家。オーナーが収集し、かつ自ら日常で使用している北欧生活雑貨を、在宅時には欲しい人に売ろうという発想と要望に対し、半地下から2階まで各階の床を見通す棚と、通りに面した細長いショウウィンドウを設けて応えている。棚と窓は常に建物全長の見通しを確保して実面積の少なさを視覚的に補っている。生活空間にあっては、2階リビングから2,3段上がった舞台のような和室とのレベル差や、至近の建物を避けつつ採光と通風を十分に得ている開口部の配置など、緻密な配慮が各部になされている。半地下部分に収まる水回りや2階リビングとの距離には難がある。それに生活上の収納棚がそのまま店舗の陳列棚も兼ねるといのは幸運な例外かもしれない。それでも、かつて都市において当たり前の存在だった商と住の連続性が、ささやかなスケールのなかで見事に具現している。



藤本 壮介

〔講評者〕

作品 **House T** 設計者 篠崎弘之

とても野心的な家だ、と感じたと同時に、なんだか強烈な違和感が湧き上がってきた。家というものをどこまで破壊していけば家ではなくなるのか、という実験のようにも受け取れるが、それよりもむしろ、家というものにまつわるさまざまなモノやコトを気楽にリミックスして放り出しているように見える。どんな風に組み合わせようと、そこに生まれる奇妙な空間で、人は生活を始めるんだ、という感じだろうか。しかしそこには人間の生活力への楽観的な尊敬があるというよりは、むしろ生活する場所という家の前提を無自覚に放棄してただ空間遊戯としての建築の趣味的な閉鎖ループにはまり込んでいるようにさえ見えた。しかし施主はとても居心地が良さそうに住んでいた。施主のライフスタイルと趣味をうまくこの空間に投影しているのを見ると、このような場所でも人間は住みこなすことができるのかもしれないと思う。そのような住宅をどのように評価するのか、というのは難しい問題だった。ある意味で、限られた世界の中での際限のない建築遊戯に耽溺するという現代日本の住宅建築の問題点を鮮やかに浮かび上がらせているとも言えるだろう。力作ではあるが、その提案に射程や広がりややはり感じられなかったことが、金賞に選ばれなかった理由であった。



講評

【住宅建築賞】

藤本 壮介

〔講評者〕

作品 **松竹台の家** 設計者 荒木源希 + 佐々木高之 + 佐々木珠穂 + 岸田佳晃

二世帯住宅の提案として、一つの家の空気感を皆が共有しながら生活する感じがとても自然に実現していて共感できた。ボリュームを分節することで建物を敷地の高低差や街並に優しく馴染ませながら、内部では丁寧なレベル差と相まって分節感と一体感がうまく共存している。 個々の場所がそれぞれの快適な居場所感と緩やかなプライバシーを保ちながら、全体が有機的に繋がって家族が楽しげに生活している。内部のスケールのおおらかさと仕上げの適度な気楽さも成功している。壁には子供の描いた絵がたくさん貼られていて、その風景はまさにこの家がしっかりと生きられている証である。それでも金賞に至らなかったのは、何気ない工夫の丁寧な積み重ねによって作られるこの幸せな家に込められた、新しさ、未来への視点の強度の問題だったと思う。そもそも、そのような新しさ、未来への提案など、住宅に必要なのだろうか?と思わせるほどこの家は幸せだったし、この幸せを実現すること自体が未来を切り開くかもしれないが、それでも、未知なる未来への野心的な視点や提案を、やはり待ち望みたい、という思いもあるのである。



妹島 和世

〔講評者〕

作品 **等々力の二重円環** 設計者 藤原徹平

周りの環境を取り囲み、環境に取り込まれながら、ほぼ敷地中央にたち、それがそのまま、建物のプランニング、形態まで連続している。つまり、生活が環境に連続している。コストや機能性から導き出された合理性が、同時に住宅の持つ親密性や快適性に注意深く重ねられている。一つだけ残念だったのが、二階の階高である。考え方としては理解できるが、実際の土地はゆるいスロープを降りたところにあり、かつ一階の床が地面より少し高いレベルに設定されているため、二階が低く見えてしまう。二階の階高をもう少し上げたら、そしてもしかしたら一階をほんの少し下げたら、より神殿のような、そしてかわいらしい住宅が出来上がったのではないかと思う。



[講評者]

林 寛治

作品 外・〈外〉・《外》

設計者 葛川かおる + 鹿田征歳

ポリカ波板とフレキ波板の外壁に覆われた鞘堂に平屋の住宅を入れ込んだ構成で、妻側から見るシンメトリカルな外観と木構造のバランスが良い。建具や細部の納まりも練られており、ポキャブラリーは豊富である。隣家が迫っている南北面は、通風のためのルーバー窓以外は半分閉じた縁側である。土間ではあるが、小屋裏と一体化したダブルスキンの空気層の印象が強い。

さてダブルスキン空間を用いたパッシブ空調とバリエーション豊かな採光に対する希求は理解できるのだが、違和感を覚えたのは、大らかな鞘堂から受ける印象に対して、中身となる居住部分が小さいことである。容積比では如何ほどだろう? 「外」への志向が前のめりになるあまり、住空間としての配慮が後塵を拝している感はやむを得ない。



[講評者]

トム・ヘネガン

作品 KG.house

設計者 清水裕子 + 清水貞博 + 松崎正寿

おそらくモダニズムの最も革新的な手法は、部屋の分割を止めたことだ。住居建築においては日常生活の異なる行為のための伝統的な空間—食堂、図書室、居間などがひとつにまとめられ、小規模住宅、特に日本における小住宅のデザインにおいて効果を発揮した。反面、その欠点は空間の均質化であり、それぞれの「機能ゾーン」では、たいてい同素材が用いられ、天井高さや照度も同じだった。

小さなKG.houseは、しかしながら、驚かされるような空間の豊かさを持っている。上階の寝室階に切り込まれた4つのポイドは、天窗からの光をオープンプランの主階へもたらし、壁の代わりに、光と影、天井高さの違いによって、リビングスペースの重複した機能を明らかにしている。夏には、ポイドは熱を逃す煙突として機能して上方へ熱を誘引し、天窗から熱気を排出し、地窓からは日陰の庭の涼気が家の中へと吸引される。

KG.houseを設計した建築家達は、四方から覗かれるという難しい、とても小さなサイトにおいてプライバシーの確保に成功しただけでなく、700ミリ高さの水平に連続する地窓によって外壁を「浮かせ」て外部への視線をつなげ、内部空間として認識される領域を広げて開放感を作り出すことにも成功した。



[講評者]

妹島 和世

作品 43base

設計者 三浦慎 + 濱野義夫

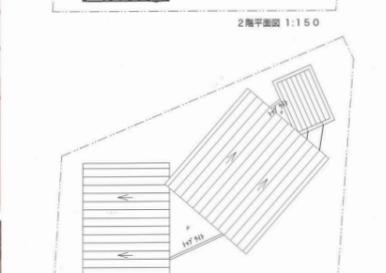
とても古い美しい石の擁壁の最後に、特殊なプロポーションの鉄骨の家が見えてきた。とても高い高さに建つから下から見上げることになるが、そこまで続く古い木造の家と同じような軽さ、スケールを持った家で、すばらしいと思った。小さい住宅であるが、それが更に、半分に割られていることがそのような外観を作り出している。その大きさは特殊な敷地でどのように作ることができるかという点から導き出されたものだと思うが、そのことが、その環境に連続性を持つ住宅を作り出していると思う。残念であったのは、内部において、それが少し強く現れてしまったことである。システムが強調されすぎていると感じた。住宅としての楽しさのようなものがシステムをどこかで変形させるチャンスはなかったのかなあと思う。



松竹台の家
二世帯6人家族が立体的なワンルームに住まう風景



北側を森に面する南傾斜の変形角地に建つ、同居型の二世帯住宅である。二世帯6人家族がひとつ屋根の下で快適に暮らすために、大小3つのヴォリュームを敷地形状に沿うように角度をつけ、そのスズレにより生じた2つの隙間と傾斜地に沿うようなスキップフロアとすることで「立体的なワンルーム」を実現した。敷地固有の周辺環境に呼応しながら、御施主様家族特有の距離感に寄り添うように提案した「立体的なワンルーム」により、多義的で複雑さを纏う二世帯家族間のコミュニケーションを誘発する新しい風景を創出した。住み始めて半年、賑やかに暮らさるべく創造と生活を目的に据え置き、驚くことともに、寄り添って住むことの可能性を感じている。





大きな額と大開口が、生活空間と地域をゆるやかに繋ぐ



屋根から光や風を取り込むリビングと和室



薪によって店舗窓がダイニングキッチン



3層に渡る吹き抜けが光を風を採りこむ



高リ切から階段使ったものが共有する



破綻空間と薪が、樹と生活空間のパワフルを創り出す



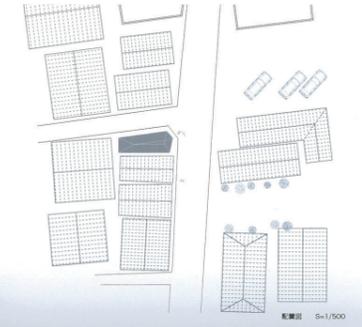
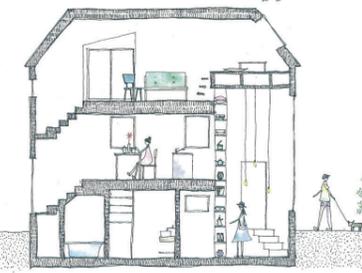
地域の人の繋がりを生む大開口を持った外観



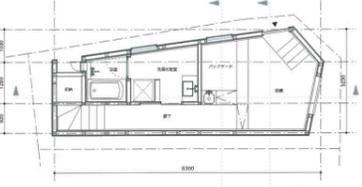
街からも薪の様子が見える大開口

FIKA

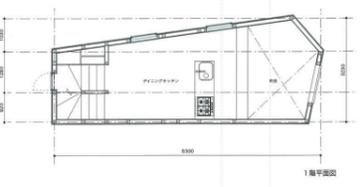
10坪の敷地に建つ、週末に北欧雑貨を売る店舗を合わせ持った住宅である。売るといふ行為は人と人、人とのつながる行為を置き換えられる。ここで売られている北欧雑貨は今までオーナーが少しずつ集めたもので、ただの売り物というよりは、今も日常的に使われている「生きていく雑貨」である。生活空間も店舗も築くべき大きな棚には、今キッチンで使っているもの、今リビングに飾っているもの、日常的に使われているものから売り物まで、その全てが棚に並んでいる。売り物も普段使うものと同じように陳列される事で、棚を通して住宅と店舗、そして地域がゆるやかに繋がりが、住むという行為が、地域の人の繋がりがつくりますことに期待する。



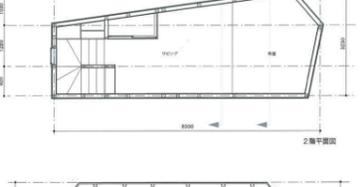
配線図 S=1/500



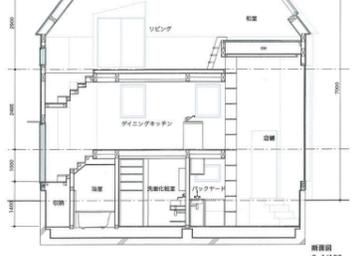
地階平面図・配線図



1階平面図



2階平面図



南立面 S=1/100



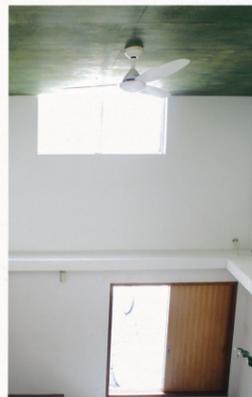
2F天井上は天井高で1300mm、電線、ロフト高をみる



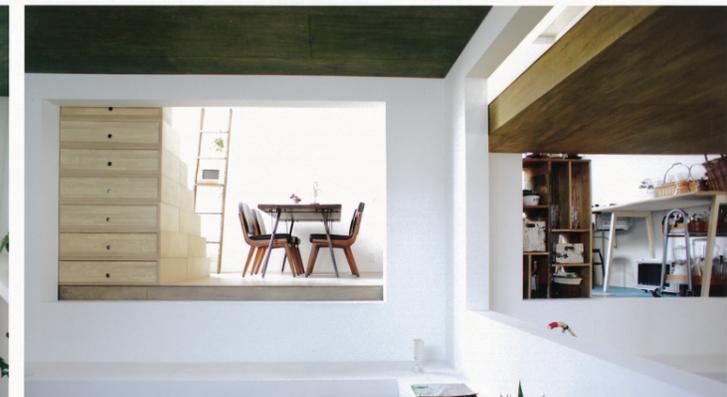
リビングから3F高をみる



セントラルからダイニング高をみる



外観は扉によって透け、外観が見え隠れする。



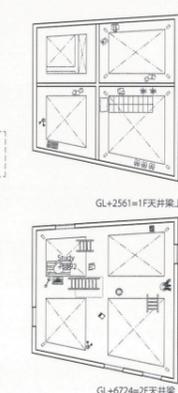
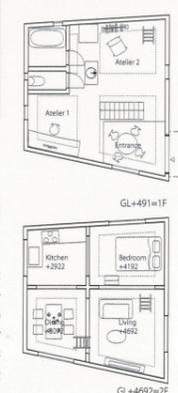
Site Plan S=1/200

Plan S=1/150

Section S=1/75

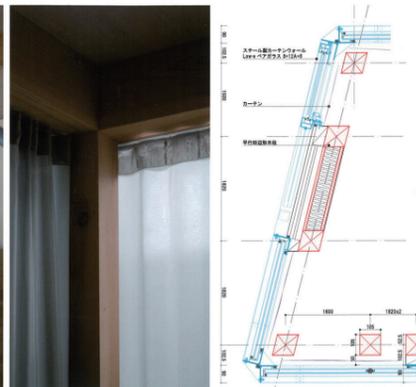
House T

敷地は都心の住宅街のなか、4面を隣地建物に囲われた旗竿敷地である。敷地の外形に合わせて平面的に少し変形した大きな箱の中に、本棚の棚板のような床が、立体的に十字に交差する樫柱・樫梁に引っ掛かることでいるるな高さの浮くという構成でこの住宅は造られている。棚板のような床には好きな家具が好きな場所に置かれて、それぞれに関係をもちながら自由に生活する場所ができていく。それらは適度に分割されながらも、上下に抜ける光と風と満たされていて一体的な空間となっている。こういった敷地のなかでも、豊かで自由な生活ができる住宅のひとつの新しい形式をつくり出そうと考えた。生活そのものを収納していくような、大きな家具のような小さな住宅である。

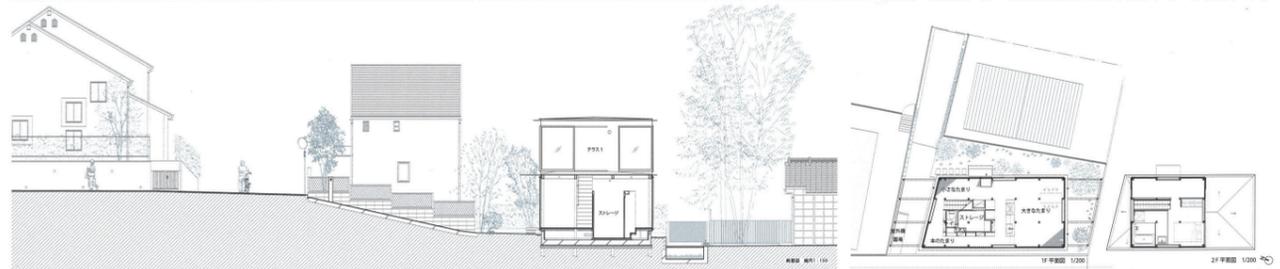




等々力の二重円環



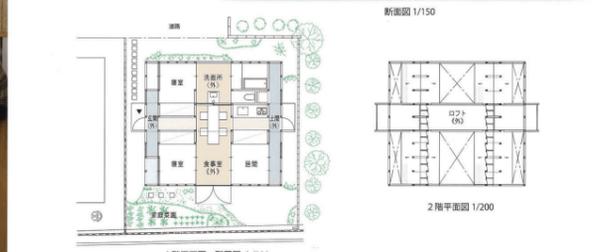
東京・等々力浜谷を中心としたワイルドな環境を積極的に楽しむ生活の拠点のあり方を考えた。敷地は旗竿上の形状をしており、アプローチから外周を一周できるような「円環状の庭」を持つ。内部は、中心に生活のためのコアをままとめぐりと一周できる「回廊」の構成をしている。庭と回廊の二重の円環によって、ここでの生活は自然活動的になる。躯体は明確なシステムを目指し定尺スパンに近い在来軸組でくみ上げた。外観は製作のLow-eペアガラスのCWとした。この境界面は、建築の内外を分かち、同時に二重の円環の境界面になる。Low-eペアガラスの物質感と透過の距離感によって構成を超えた奥行きが生まれることを期待した。

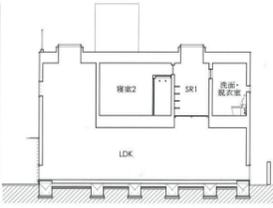


洗面所=〈外〉から風呂小庭越しに北側の土間を見る。外壁ルーバーと天窓の光。現わしの架橋によって樹下のような雰囲気を作る。

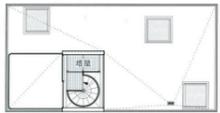


外・〈外〉・〈外〉
樹木の下、タープの下、バンガローの下。アウトドライブでは、「外」という一言ではあまりある、様々な光や空の状態を演繹することができる。私達は、そんな豊かな住まいをめざし、開放的な環境を望む庭地に、徐々に室内化の深度を増してゆく層つきの家をつつた。庭で収穫した野菜の保管や物干場となる最も近い土間や洗面所=〈外〉は、外壁ルーバーと天窓の光。現わしの架橋によって樹下のような雰囲気をめざした。〈外〉から一段階室内化された食事室=〈外〉の天井は、透明度の異なるポリカをランダムに貼ることでタープの下のような優しい光を室内に照らし出す。最も身体に近い小庭一帯は、木毛漆を塗り貼りとした屋根、雨戸風の引戸といった風情で、さすがにバンガローのようなものである。そしてまた外から続く二つの層は、平面的にも立体的にも重なり合い、景色のような深さや、平面的な奥行きとは異なる深みのあるものをこの家に与えている。冬は、壁外壁の〈外〉を熱だまりとして利用し、暖められた空気を室内に送る計画とした。夏は、3台の機械換気設備と開閉式天窓などの自然換気によって、絶えず空気が入れ替わる木箱のような環境をめざした。





断面図 S=1:150



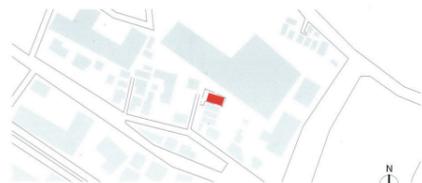
塔屋階平面図 S=1:150



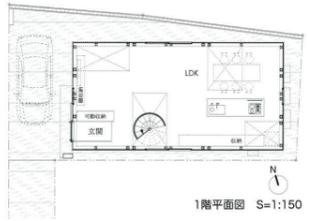
2階平面図 S=1:150

LDKには連続した地窓からの反射光と光庭からの光が降り注ぎ、光あふれるワンルーム空間となっている

KG.house
敷地は幹線道路から一本入り、新興住宅地に位置する旗竿敷地である。旗竿敷地特有の奥まった静けさはあるものの近隣の視線が行き交うこの場所で、敷地に密着しながら周辺と分離された住環境を模索した。木製トラス構造によって建物全体を持ち上げることで地窓を水平に連続させ、敷地全体に視線を広げると共に地面からの反射光を1階のワンルームに取り入れている。大きな垂れ壁と2階のジグザグヴォリュームに囲まれた1階は十分な採光と通風を獲得しながら空間の奥としての性格を保っている。密接と分離といった相反する操作によって空間として旗竿敷地の奥性を高め、閉じつつも開いた住環境を獲得している。



配置図 S=1:2000



1階平面図 S=1:150



光庭からの光が降り注ぎLDK



木製トラス構造によって建物全体を持ち上げられた外観



2階のジグザグヴォリュームに囲まれた1階は空間の奥としての性格を感じさせる

2階面窓群は光庭に面した開口をもち、プライバシーを確保しつつ通風・採光を高めている

光庭としての役割をもつ階段室

居室の開口は1階まで光庭として連続している

光庭によって分離された2階面窓群

居室群はそれぞれ特徴的なカラーをもち

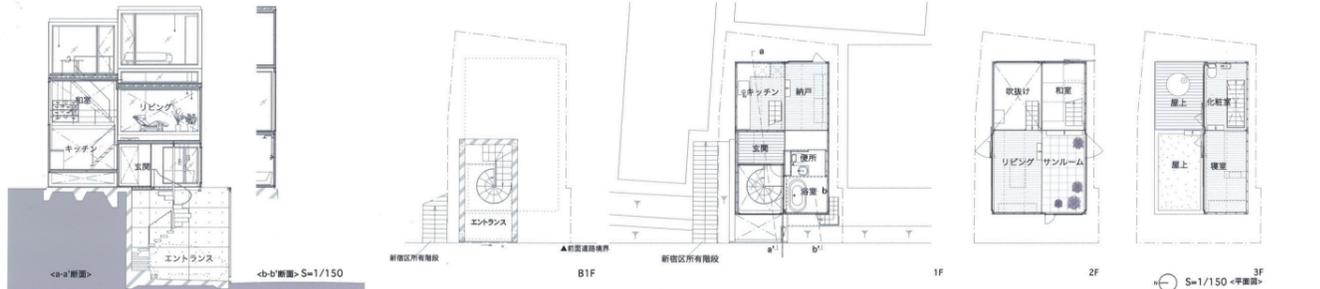


43base

四谷三丁目駅から徒歩3分という都心の狭小住宅である。家族構成は少し複雑で、建主である女性を中心に、妹夫婦、親夫婦が都心から1時間の場所に拠点をもち、別々に住んでいるけれどよく集まる。各々頻度は異なるが全員の都心の拠点としての利便性も求められた。そんな状況の中で、プライバシーは個々の生活時間のずれにより確保され、それぞれの空間が帯状に連なり畳まれ、視線が折り重なりながらひとつの住宅となっていく。この小さな直方体ユニットを集積させることで、都心狭小という現代ならではの生活像と、プロダクティブな生産方法を重ね、ひとつの民家的な表現としたかった。最上階の屋上庭園に至るまで、狭・広、低・高を繰り返す。目に入ってくる寸法をなるべく小さくすること、ユニットの分節と連続、光の濃淡、視線の編集によって、実際の面積以上に感覚的な広さが確保され、小さいけれど、おらかな器になれたかなと感じている。



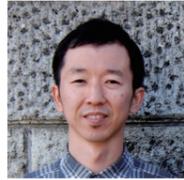
集積された直方体ユニットはひとつひとつが、150×100×12mmのL形断面によるラーメン構造の部屋となっている。ユニットは工場遊接によって製作されて現場に運ばれ、クレーンで積層していった。L形の端を屋内側に向ける事でユニット内に凹凸をなくし、小さな空間を目一杯使う事ができる。



<0-0'断面> <b-b'断面> S=1/150 <1F> <2F> <3F> S=1/150 <平面図>

住宅建築賞受賞者プロフィール

松竹台の家



荒木源希

Motoki Araki

1979年：東京都生まれ
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業
2004年：東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
2004～2007年：アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所勤務
2008年～：アラキ+ササキアーキテクト共同主宰



佐々木高之

Takayuki Sasaki

1978年：広島県生まれ
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業
2005年：イーストロンドン大学大学院ディプロマ修了
2005～2007年：NAP建築設計事務所勤務
2008年～：アラキ+ササキアーキテクト共同主宰
2009年～：ICSカレッジオブアーツ講師



佐々木珠穂

Tamaho Sasaki

1979年：富山県生まれ
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業
2005年：イーストロンドン大学大学院ディプロマ修了
2008年～：アラキ+ササキアーキテクト共同主宰



岸田佳晃

Yoshiteru Kishida

1982年：神奈川県生まれ
2005年：日本大学理工学部建築学科卒業
2005年～2007年：イーストロンドン大学大学院ディプロマ留学
2008年～：アラキ+ササキアーキテクト

FIKA



西田司

Osamu Nishida

1976年：神奈川県生まれ
1999年：横浜国立大学卒業
スピードスタジオ設立
2002年～2007年：東京都立大学大学院助手
2004年：オンデザインパートナーズ設立
2005年～2007年：首都大学東京研究員
2005年～2008年：神奈川大学非常勤講師
2005年～2009年：横浜国立大学大学院(Y-GSA)助手
2005年～2009年：東京理科大学非常勤講師
2010年～2013年：東北大学非常勤講師
2012年：The University of British Columbia(カナダ)非常勤講師
現在：東京大学、東京理科大学、京都造形芸術大学非常勤講師



一色博貴

Hirotaka Isshiki

1981年：千葉県生まれ
2006年：千葉工業大学大学院修了
山本理顕設計工場
2009年：ヘルム
2011年：オンデザインパートナーズ



梁井理恵

Rie Yanai

1983年：神奈川県生まれ
2009年：首都大学東京大学院修了
オンデザインパートナーズ

House T



篠崎弘之

Hiroyuki Shinozaki

1978年：栃木県生まれ
2000年：京都工芸繊維大学工学部造形工学科卒業
2002年：東京藝術大学大学院美術研究科修了
2002年～2009年：伊東豊雄建築設計事務所
2009年：篠崎弘之建築設計事務所設立
現在：東京電機大学非常勤講師

等々力の二重円環



藤原徹平

Teppei Fujiwara

1975年：横浜生まれ、横浜国立大学大学院修了
2001年～：隈研吾建築都市設計事務所勤務、設計室長、パートナーを経て2012年退社
2009年～：フジワラテッペイアーキテクトラボ主宰
2010年～：NPO法人ドリフターズ・インターナショナル理事
2012年～：横浜国立大学大学院 / Y-GSA准教授

外・〈外〉・《外》



葛川かおる

Kaoru Kuzukawa

1965年：岐阜県生まれ
1989年：名城大学理工学部二部建築学科卒業
1991年：豊橋技術科学大学大学院建設工学科修士課程修了
1991年～2004年：株式会社梓設計
2004年：あす設計室設立



鹿田征歳

Masatoshi Shikada

1970年：東京生まれ
1994年：法政大学工学部建築学科卒業
1996年：法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了
1996年～現在：株式会社梓設計
2004年：あす設計室設立

KG.house



清水裕子 (写真:左)

Yuko Shimizu

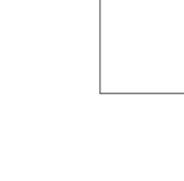
1975年：千葉県生まれ
1998年：日本女子大学家政学部住居学科卒業
2000年：東京工業大学大学院修士課程修了
2000年～2002年：Hellmuth,Obata+Kassabaum,inc
2002年～2005年：LAGUARDA.LOW+TANAMACHI ARCHITECTS
2002年：atelierA5設立
2006年：有限会社 atelierA5 建築設計事務所に改組 取締役



清水貞博 (写真:中央)

Sadahiro Shimizu

1973年：宮城県生まれ
1998年：東京工業大学工学部建築学科卒業
2000年：東京工業大学大学院修士課程修了
2000年～2004年：大成建設本社設計本部
2002年：atelierA5設立
2006年：有限会社atelierA5建築設計事務所に改組 代表取締役
現在：東京理科大学非常勤講師



松崎正寿 (写真:右)

Masatoshi Matsuzaki

1975年：神奈川県生まれ
1998年：日本大学理工学部建築学科卒業
2000年：日本大学大学院修士課程修了
2000年～2004年：大成建設本社設計本部
2002年：atelierA5設立
2006年：有限会社atelierA5建築設計事務所に改組 取締役

43base



三浦慎

Shin Miura

1971年：広島県生まれ
1995年：東京藝術大学美術学部建築科卒業
1997年：同大学院美術研究科修了
2000年～2003年：同建築科助手
2004年：三浦慎建築設計室設立
2004年～2006年：工学院大学専門学校非常勤講師
2006年～：工学院大学非常勤講師



濱野義夫

Yoshio Hamano

1936年：東京都生まれ
1960年：日本大学理工学部建築学科卒業
1960年～1997年：鹿島建設
1997年～2001年：埼玉工業大学専門学校建築学科主任教授
2006年～：三浦慎建築設計室